様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００００８３

研究課題名（和文）普遍宗教と現地適応－インドのカトリック教会における儀礼の社会性と多義性を焦点に－

研究課題名（英文）Universal Religion and Its Glocalization - Focused on Social Aspects and Diversities about Rituals of Catholic Church in India

研究代表者
岡光　信子（Okamitsu, Nobuko）

中央大学・政策文化総合研究所・客員研究員

研究者番号：５０４４７１１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究が対象とするカトリック教会は、普遍性を標榜する宗教組織であり、教会の統一性を維持する普遍的な要素と宣教地における多様性のもとに、宣教活動を行っている。本研究の目的は、普遍性と多様性という対照的な要素が公的な儀礼に存在することに注目し、宣教地における文化や伝統を取り入れる現象「インカルチュレーション」について、具体的に現地調査を行い、情報を収集し、それについて検証するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、キリスト教のインドにおける現地適応の問題を取り上げるものである。キリスト教は、宣教の初期段階から現地社会で慈善活動を展開し、本来の宗教的意義に加え在地社会の文化的・社会的文脈で多重の世俗的役割を担ってきた。本研究は、宗教の持つ公益性の問題にも焦点をあて、宗教の現地への適応と定着が、移植先の社会的ニーズを満足させる過程の中に実現していくことを学術的に検証するという社会的意義を有する研究である。

研究成果の概要（英文）：The Catholic Church, the subject of this research, is a religious organization that advocates universality, and conducts missionary activities based on the universal elements that maintain the unity of the Church and the diversity of its mission sites. The purpose of this research is to focus on the contrasting elements of universality and diversity in official religious rituals, and to conduct specific field research on the phenomenon of "inculturation," which incorporates cultures and traditions in mission sites. conduct, collect information, and verify it.

研究分野：宗教学

キーワード：キリスト教　インド　インカルチュレーション　文化適応　カトリック教会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

カトリック教会は、ローマ教皇を頂点とした普遍主義を標榜する宗教であるが、現地化する過程で地域文化と接触することで変容してきた。このようなカトリック教会の現地化の事例は、「インカルチュレーション」として知られている。本研究は、カトリック教会の「インカルチュレーション（inculturation)」事例について、宗教に多重の意義を付与される現象を「宗教のグローカリゼーション」という概念枠組から捉え直す。

本研究では、宗教儀礼の諸相に焦点を絞り、儀礼の挙行が、本来の宗教的意義に加え在地社会の文化的・社会的文脈で多重の世俗的役割を担っている諸事例を収集し精査する。世界宗教の現地への適応と定着が、移植先の社会的ニーズを満足させる過程の中に実現していくことを、キリスト教を事例に検証したい。

２．研究の目的

カトリック教会に関する研究は、従来以下の二つの流れに沿って進展してきたと言ってよい。

(A)「教会論」および「神学研究」(宣教地の文化現象を顧慮しない原理的な研究)

(B)「フォークカトリシズム研究」(現地化した宗教現象を民俗学的手法で扱う研究)

本研究は、(A)(B)両様の立場を止揚した複眼的・統合的視座を確保し、まず典礼の中に存するカトリック儀礼としての「普遍性」を確認ののち、現地適応する過程で現出する「多義性」、特に宗教儀礼の「世俗的･社会的機能」を考察するという新たな切り口からアプローチするものである。

本研究は、宗教の現地適応の問題を中心に据え、「インカルチュレーション」と呼ばれる典礼の地域化（indigenization）とハイブリッド化（hybridization）を「グローカリゼーション」の典型例と捉えて精察するものである。本研究では、普遍主義を標榜するカトリック教会を問題とするため、教会が公認する典礼の式次第と注釈書の分析が第一課題となる。

本研究は、文献と現地調査を同時並行に行いながら、「インカルチュレーション」と称されるキリスト教の現地適応について実際に現地調査を行いその実態を解明するものである。

３．研究の方法

本研究は、「インカルチュレーション」の問題について、インド南端部にあるローマカトリック教会コータ教区を取り上げ、現地の文脈において、典礼の挙行が宗教的意義だけでなく世俗的・社会的意義をも多重的に併呑する状況について、「グローカリゼーション」という解釈枠組みも援用して考察するものである。

本研究では、以下の２つの基本課題の達成が説得力ある成果産出の前提となる。

(1) カトリック教会の宣教政策に反映される典礼に関する公式見解を文献資料により整理する。

(2)カトリック教会の典礼の変容の諸相についての実例を調査地で最大限収集し分析・解釈する。

文献研究と現地調査の二段構えの作業に5年の期間を要する。フィールドワークでは定性的方法（質的調査）が主体となるが、儀礼の解釈には象徴分析的方法も援用する。

４．研究成果

2018 年度

2019 年 2 月、3 月、研究代表者は、インドのタミルナードゥ州カンニヤークマリ県において、現地調査を行い、カトリック教会の公的な儀礼について実例を収拾した。そこでは、カトリック

教会の典礼と呼ばれる公式な儀礼に参加して具体的な儀礼の要素を記録した。

さらに、調査地域において行われている人生儀礼について、同じコミュニティーでも異なる宗教（カトリック教徒、ヒンドゥー教徒）、同じ宗教（ヒンドゥー教徒）でも異なるコミュニティーにおいて実践されている事例に関するデータを収集した。

同時に、カトリック教会の公式文書、声明なども収集し、それらを分析することでカトリック教会の宣教政策についての最新の状況を分析した。

2019 年度

インド系のカトリック教徒の儀礼の変容を明らかにする前段階として、宗教の違いを超えてインド系の人々がどのような儀礼を共有し、共有しないのかを地域横断的に調査する必要があった

2019 年 9 月に実施したフィジーでは、首都スバにてインド系の住民の調査を行った。フィージーにおける宗教の違いは、民族の違いによって分かれる。インド系住民は多くはプランテーション労働者として入植し、インドの様々な地域から集められ、低カースト・貧しい出自をもつものである。また、プランテーション内でのコミュニティーが築かれ、その内部で独特の文化を形成していく。そのため、インド系住民は、個々人がその環境に応じて儀礼をおこなっている様子が観察された。

2020 年 2〜4 月、シンガポールのインド系移民、インドネシアのインド系移民に関する調査を行った。シンガポールのインド系住民は、プランテーション労働者、高等・専門教育を受けた集団という旧移民と IT 関連の新移民に分かれる。旧移民は、シンガポール人としての強いアイデンティーをもち、宗教別に実践する儀礼が異なっていたた。新移民は、母国にいる母集団と強い絆を形成し、母国で母集団が行う儀礼をできるだけ再現していることが観察された。

インドネシアのインド系移民は、プランテーション労働者とビジネスチャンスを求めてきた集団に分かれる。プランテーション労働者の子孫は、低カーストの出自で、未だに生活が貧しいものが多く、伝統的な儀礼を共有していないことが観察された。

2020年度

2020年度は、当初の予定では、インドのタミルナードゥ州カンニヤークマリ県において、現地調査を行い、カトリック教会の公的な儀礼について実例を収拾することにしていた。しかし、コロナ禍でインドへの渡航がかなわなかった。既知の研究者とインターネットでのやり取りを行い、研究に関する助言や情報の収集を行った。

コロナ禍という状況で、インドでは厳しいロックダウンが執行され、国外だけでなく国内移動が禁止され、必要以外の外出が禁止された。そのため、カトリック教会でも就労者が教会やオフィスにも出勤できず、教会での典礼も行わない状況が続いた。

2021 年度

202１年度は、コロナ禍においてインドに渡航ができず、調査対象地域である、カンニヤークマリ県における現地調査で、カトリック教会の公的な儀礼について実例を収拾することが不可能であった。その代わり、既知の研究者および調査地の研究協力者とインターネットでやり取りを行い、コロナ禍における教会の運営、宗教儀礼の様相がどのように行われたのかについて情報を集めた。

コロナ禍という非常に特殊な状況で、多くの教会が閉鎖される状況が続いた。こうした状況に

おいて、カトリック教会の公式文書等を収集し、教会がどのような声明を出し、その内容について精査行った。

2020 年 3～4 月、インド系住民が多い、シンガポールへの入国が解禁されたことから、シンガポールのカトリック教会およびインド系住民への調査を行う。

2022 年度

コロナ禍で、インドへの渡航が難しくなり調査の方法を変更し、オンラインを使って、インフォーマントへのインタビューや情報収集を引き続き行った。インドのカトリック教会の宗教者（司祭、修道女）には、オンラインで、コロナ禍におけるカトリック教会の感染症病への対応や対策、ミサなど本来 は教会で信者と一緒に行う宗教儀礼をどのような形で継続していたのか、これまで行っていた信者への宗教的なサービスに関する活動状況に関して多くの情報を得ることができた。

また、信者へのオンラインを使ったインタビューや情報交換を行い、コロナ禍における信者の側から見た宗教組織のサービスに関する情報を 得ることができた。インターンネットを使って、問題点や疑問点に関して質問等を行って、儀礼に関する補助的な調査を行った。

コロナ禍によりインドへの渡航が困難ことから、カトリック教会のインカルチュレーションの事例について、東南アジアのカトリック教会およびインド系住民への調査を行った。

2022 年 8 月、シンガポールのカトリック教会およびインド系住民への調査を行う。シンガポールでは、エスニックグループごとのつながりが強く、インド系住民は旧移民・新移民を含めてそのコミュニティーの中で人間関係を形成している。宗教的なつながりよりもエスニシティのつながりが優位となっていることが確認された。

2022 年 9 月、マレーシアのペナン州において、カトリック教会およびインド系住民に関する調査を行った。カトリック教会は、エスニックグループごとに異なる言語で典礼がなされる様子が観察された。インド系住民は、南インドからのプランテーション労働者の子孫が多く、低カーストの出自で、未だに生活が貧しい状況を抜け出せず、サンスクリット化された宗教儀礼を継承していないことが観察された。

2023 年 2 月、タイのバンコクでカトリック教会およびインド系住民に関する調査を行った。カトリック教会は、コロナ禍の状況で平日は教会が閉鎖されており、通常の宗教活動に支障が生じていることが観察された。また、バンコクのインド系住民は、北インド出身者が多くヒンドゥー教とシク教徒が多数派であることが観察された。

本研究が対象とするカトリック教会は、普遍性を標榜する宗教組織であり、教会の統一性を維持する普遍的な要素と宣教地における多様性のもとに、宣教活動を行っている。本研究の目的は、普遍性と多様性という対照的な要素が公的な儀礼に存在することに注目し、宣教地における文化や伝統を取り入れる現象「インカルチュレーション」について、具体的に現地調査を行い、情報を収集し、それについて検証するものである。

カトリック教会は、教会としての普遍性を維持するため、公的な儀礼については普遍的なフォームを規定している。一方で、カトリック教会の宣教は、言語、文化、慣習、気候が異なる地域で行われており、こうした地域性への配慮が見られる。そのため、カトリック教会の公的な儀礼は、普遍的なフォームを維持しながら、地域における特徴が取り入れられている。本研究の調査対象地域は、インドのタミルナードゥ州カンニヤークマリ県で、カトリック教会が典礼を現地語で行うことを認可して以来、タミル語等の現地語が儀礼執行において使用されており、典礼の中にも現地社会でのよく知られている要素が導入されていることが確認された。

新型コロナの世界的な大流行という想定以外の出来事が既存の宗教組織に与えた影響を知ることができた。今後は、現地調査が長期的にできないことも考慮に入れて、対応策を考えなら柔軟に研究活動を行うことにする。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岡光信子	４．巻 95
２．論文標題 宗教を超える紐帯－南インドの異宗教間結婚を事例にして	５．発行年 2022年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 269、270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡光信子	４．巻 94
２．論文標題 宗教儀礼の世俗性－インドカトリック教会の初聖体を事例に－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 287-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡光信子	４．巻 93
２．論文標題 「日常の中の宗教―新中間層映画『ランチボックス』の事例から―　」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『宗教研究』	６．最初と最後の頁 131-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nobuko Okamitsu	４．巻 24
２．論文標題 Portrayal of Religion in the Indian Movies as Seen in The Lunchbox.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Annual Bulletin of the Institute of Policy and Cultural Studies	６．最初と最後の頁 107-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡光信子	4．巻 94
2．論文標題 宗教を超える紐帯－南インドの異宗教間結婚を事例にして	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『宗教研究』	6．最初と最後の頁 287-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡光信子	4．巻 95
2．論文標題 「インドネシアにおけるカトリックの慈善事業の持続可能性と限界」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『宗教研究』	6．最初と最後の頁 274-275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 岡光信子
2．発表標題 宗教を超える紐帯－南インドの異宗教間結婚を事例にして
3．学会等名 日本宗教学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 岡光信子
2．発表標題 宗教儀礼の世俗性－インドカトリック教会の初聖体を事例に－
3．学会等名 日本宗教学会
4．発表年 2020年

１．発表者名 岡光信子
２．発表標題 「日常のなかの宗教―新中間層映画『ランチボックス』の事例から―」
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡光信子
２．発表標題 「インドのカトリック教会の秘蹟に見られる土着性と普遍性」
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡光信子
２．発表標題 インドネシアにおけるカトリックの慈善事業の持続可能性と限界
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関